

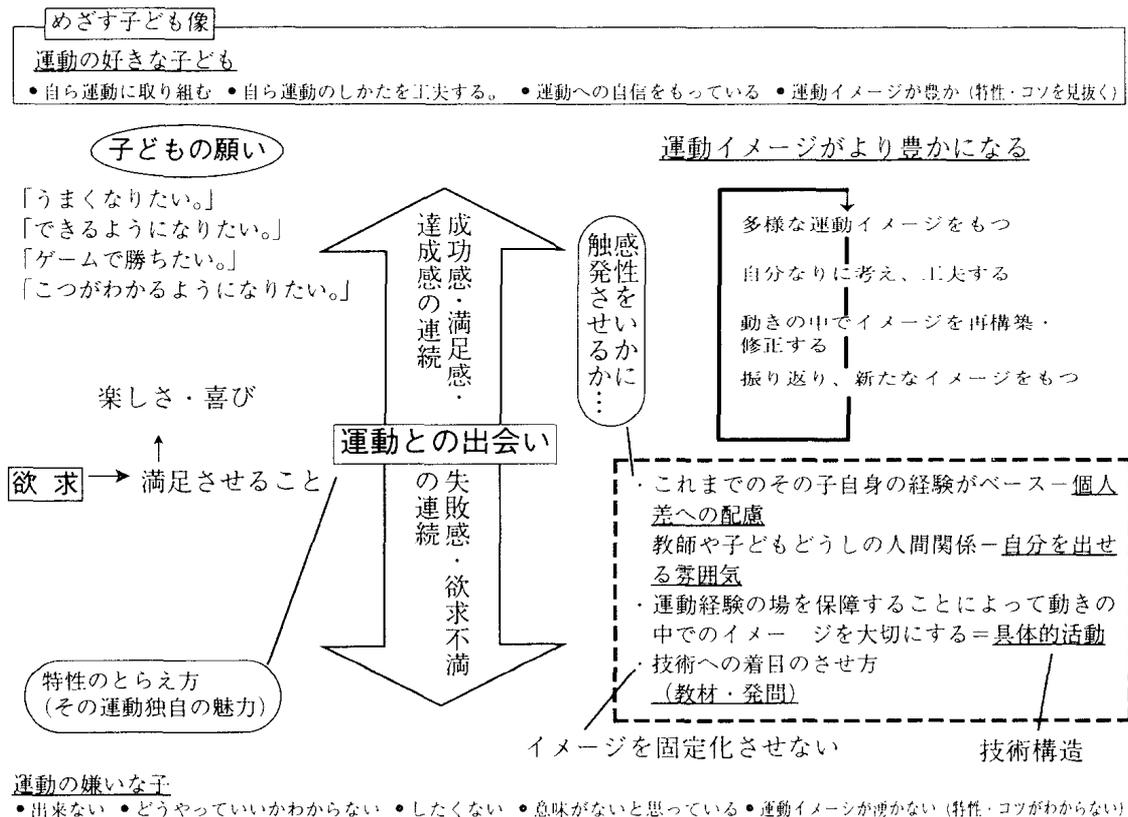
体 育 科

1 めざす子ども像

学ぶ意欲を大切に、生涯スポーツの実践力を育てることが小学校体育における中心的な課題となっている。このことは、子どもたち一人ひとりに運動の楽しさや喜びを味わわせ、満足感や達成感を得させることによって、より「運動好きな子ども」を育てていくことが求められているといえよう。この「運動好きな子ども」こそ、本校体育科としてめざす子ども像であり、研究のテーマや方法論は変わろうと普遍的に追い求めていく姿であると考えている。「運動好きな子ども」の具体的な姿を以下のように考えた。

- 自ら運動に取り組んでいる子ども
- 自ら運動の仕方を工夫している子ども
- 運動への自信を持っている子ども
- 運動イメージ（特性、コツを見抜く力）が豊かな子ども

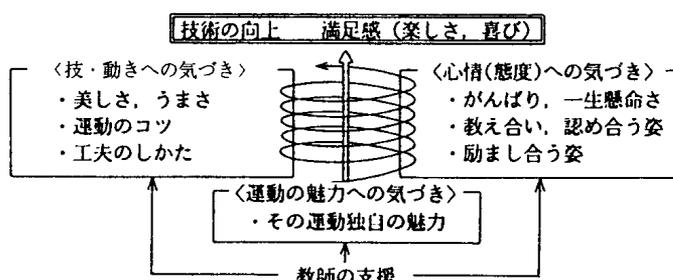
これら「運動好きな子ども」の姿に共通することは、運動に対し、主体的に関わっているということである。換言すれば、その運動に価値を見いだしているからこそ主体的に関われるといえよう。



2 体育科における感性

感性は「価値あるものに気づく感覚」と定義される。運動に対し、主体的に関わろうとする「価値あるもの」とは何か。本校体育科では、子どもの感性がはたらく対象を、質的に3つに分類してみた。

1つめは、運動の魅力（独自の面白さ）にかかわるもの、2つめは、動きや技にかかわるもの、3つめは、心情（態度）にかかわるものである。これらの対象に対して感性が触発され、より広く、より深く気づいていく姿を豊かな感性が育まれていく姿ととらえている。



豊かな感性が育まれていくこと、すなわち、価値あるものに対して、より広く、より深く気づいていくためには、実践していく運動に対して、自分なりのこだわりが必要であると考え。「うまくなりしたい」「できるようになりたい」「勝ちたい」など、自分なりのこだわりがその実現をめざして次のこだわりを生む。この繰り返しの中で、自分自身が納得するような実感をともなったわかり方をし、さらにうまくなっていく、できるようになっていくこと（自己実現）が大切にされなければならない。

こだわりの過程において、その実現のために切実な問題意識をもち、それを具現化しようとしたとき、内発的なめあてが生まれると考える。そうして生まれためあてを解決することは、自分にとって切実なことであり、それを追究することはおのずと学ぶ価値のあるものになる。

そうした過程の中で、「やってよかった」「本当に楽しかった」「またやりたい」と思えるような実感を得る。そして、その経験を積み重ねていくことによって、運動好きになり、自ら学ぶ意欲をもち、生涯スポーツの実践力が育つことにつながると考えている。

3 豊かな感性を育む体育科学習

そこで、次のような考えを柱にして、授業づくりに取り組んできた。

○ 子ども一人ひとりの内面にある思いや考えを大切にする。

運動技術の習得過程において、知的な面（わかる）や心理的な面（やる気、意欲、緊張、不安等）のはたらきが影響してくる。特に心理的な面のはたらきは、子ども一人ひとりの心の状態や価値観によるところが大きい。子ども

一人ひとりの内面にある思いや考えを大切にし、学習する仲間とともに高まる授業をめざす。

○ 満足感・達成感のある授業づくりをする

「十分動いて気持ちよかった」「すっきりした」という生理的満足感だけでなく、「やってよかった」「本当に楽しかった」「またやりたい」と思わせるような心理的満足感まで味わえるような授業づくりをする。

この2点をふまえ、子ども一人ひとりが「わかる・できる」喜びを味わうことをめざして、互いに見合い、教えあって学習する授業づくりを試みた。

豊かな感性を育む学習構想、授業づくりのポイントをまとめると以下の通りである。

(1) 学習の構想

学習のステップ	めざす子ども像 (内言)	教師の役割
1. めあてをつかむ ＜気づく・感じる＞	○ 具体的で切実なめあてをもてる子ども ・ 未知へのあこがれ、すなおな目、感受性に富んでいる。 「いいなあ」「すごいなあ」 「きれいだなあ。」 「やってみたいなあ。」 etc.	◎ <u>子どもとの対話の中で思いや願いをつかみ、学習の共通課題を設定する。</u> その際、ひとりひとりの <u>こだわりがもてるような言葉で提示する。</u>
2. 解決の見通しをもつ ＜想像する・考える＞	○ 解決方法を見いだしている子ども ・ 個性的、創造的である。 ・ 自分自身の世界をもっている。 「どうしたらできるようになるんだろう？」 「こうしたらうまくいくかな？」 「こうしてみよう。」 etc.	○ 見通しがもてない子どもに対しては、見通しがもてるように他者観察を促したり、教材の特性や発達段階に応じた問いかけをしたりする。 「こういうやり方もあるよ」 ＜調節＞ 非権威的態度で。 「こうしなさい。」…×
3. めあてを追求する ＜表現する・実践する＞	○ めあての解決に向かって自発的（能動的）に集中して取り組む子ども ・ 集中的、自発的、自立的 ・ 没頭している。 「よし、がんばるぞ。」 「うまくいかないな。でもがんばろう。」 etc.	○ <u>課題追求の場や時間の保障をする。</u> また、子ども自身の追求を大切にするために、指示や価値の押しつけをむやみに行わない。
4. ふりかえる ＜ふりかえる＞	○ 自己のめあてに対して、取り組みを謙虚に見つめ、それを新たなめあてに生かす子ども ・ 自己の取り組みを謙虚に柔軟に見つめる。 「うまくいったぞ。次はこうしてやってみよう。」 「失敗だった。次は、こうしてやってみよう。」	◎ めあてに対してふりかえり新たなめあてがもてるようにするために、 <u>発展性、系統性をふまえ、視点（めあてに照らした評価基準）を示してふりかえることができるようにする。</u>

(2) 授業づくりのポイント

① 運動との出会わせ方

子どもにとって運動の出会いは様々である。既に何度もやったことのある運動もあれば、初めての運動もある。いずれにせよ、授業の中で、その運動をどういう方向（技能習得、学び方の学習等）で追求していくかが大切なポイントとなる。子どもの実態を把握し、子どもの願い・欲求を満たすという側面を大切にしながらも、教師が教えたこと・気づかせたい価値に結びつけて、その方向づけを図る必要がある。

② 学習集団の構成・組織化

個人が課題を追求する運動においても、集団が結果を競い合う運動においても、集団のもつ意味は大きい。集団が、受容的で協力的であれば、個の考えや想いは実現の方向に向かって広がっていくであろう。学習する単元の特性を考慮して、学習集団を構成し、お互いに高まり合えるように組織していくことが大切であると考え。

③ 技術構造への着目のさせ方

子どもたちの「もっとうまくなりたい」「できるようにになりたい」という願いを子ども自らの手で実現させるためには、励ましの言葉をかけるだけでは十分ではない。また、教師が「もっともいい」と思える技術やコツを一方的に与えたとしても、子どもにとって、それが実感のない、また、自分の課題と結びついていなければ「つまらない」ものになってしまうであろう。運動が「できなくてもよい」のでもなく、「できさえすればよい」のでもない。自分自身が納得（実感をともなったわかり方）して、さらにうまくなっていく、できるようにしていくことが大切にされるべきであろう。そのためには、どんな運動をどんなふうに進めていくのか、その視点を提示し、子どもに着目させる必要があると考え。

④ 主体的に課題追求できる時間と場の保障

自分の求めるこだわりのあるものに向かって、必死になって体を動かして試そうとし、自分のもちうる限りのイメージを膨らませ、そのイメージを再構築しながら、よりよいものを求めていくことができるような活動の場と時間が十分に保障されていなければならないと考え。

⑤ 評価による次時の課題の明確化

自己の取り組みの結果が次の時間に生きることは、子どもが主体的に活動していく上で大切である。そのためには、本時の取り組みを振り返り、次時の課題が生まれるような授業の終末であることが大切であると考え。